

Book Review

歯の比較解剖学 第2版

後藤仁敏・大泰司紀之・田畑 純・花村 肇・佐藤 巖 編集



Reviewer

栗栖浩二郎 Koujiro Kurisu
(大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科)

B5判, 304頁
定価(本体10,000円+税)
医歯薬出版刊



エナメル芽細胞のトームス突起に名を残す英国のSir John Tomesは基礎・臨床の歯科医学の先駆者であるが、魚類や両生類など多くの動物の歯の組織学の創始者でもあった。たとえば、線維結合、骨性結合、端性結合、側性結合、釘植などの歯の植立様式は彼の研究成果である。また、ヘルトビツヒの上皮鞘に名を残すドイツのRichard Hertwigは、発生学者、動物学者、比較解剖学者である。マラッセ上皮遺残はフランスの解剖学者であるLouis-Charles Malassezに、また、象牙質成長線のエブネル線条は、オーストリアの解剖学者であるAnton Gilbert Ebnerに由来する。このように、19世紀に歯科医学の基盤を作った先人たちはほとんど例外なくヒト以外の動物の歯の研究を行っていて、これらに精通していた。すなわち、現在の歯科医学の基盤には比較解剖学や進化・発生学の研究があったことを忘れてはならない。本書、『歯の比較解剖学』はそうしたことを思い出させてくれる。

『歯の比較解剖学』の初版の発行は1986年であり、今回の改訂は実に28年ぶりという。旧版は、サメの研究や歯の進化研究で名高い後藤仁敏氏と哺乳類の生態学者である大泰司紀之氏の2名で編集されていたが、第2版では、

両生類などの歯の研究をしている佐藤巖氏、スクスなど食虫類研究や人類学研究の花村 肇氏、器官培養や分子生物学的手法で歯の発生研究をしている田畑 純氏が加わり、5名での編集となっている。また、著者には旧版編者の上記2氏に加えて石山巴喜夫氏ら合計13名が名を連ねている。

本の構成はほぼ旧版に沿っている。すなわち、第1章が「緒論」、第2章以降で魚類、両生類、爬虫類、哺乳類について詳細に記述され、第6章で「歯の進化」が記載されている。あらたな項目は第6章の「2. 遺伝子からみた歯の進化」であり、これは編著に新たに加わった田畑 純氏による記述である。歯の遺伝子といいつつも、その詳細をリストアップするのではなく、歯の発生研究や形態異常などから、どのように「歯のかたち」が制御されているのかがまとめられており、現在の歯の発生の研究に大きな示唆を与えるものである。また、第6章の「3. 人類の歯の進化」においても茂原信生氏の「モンゴロイドの歯の特徴」が加えられていて、これも興味深く、人類学の進展もめまぐるしいものがあると感じた。

動物の分類は初版発行からの28年間でだいぶ変わったと聞き及ぶが、こ

の本では堅実さをとって、やや古典的な分類を採用している。この本の目的と読者の便宜を考えての処置と思われる。

たとえば、エナメロイドなどの用語や概念の統一感は旧版にはなかったものである。また、組織学や発生学的な記載がより正確になっていることを各所で確認できた。

その一方で、たとえば、歯冠セメント質や中間セメント質、脈管象牙質、骨様象牙質などの組織学用語があまり説明なしに突然使われるところなどがあった。また、エナメル小柱などの有無や構造変化なども組織学的な記載が欲しいと感じた。

しかしながら、現在、こうした歯の研究を歯科医学よりもっと大きくくりで捉え、それをこれだけコンパクトにまとめている書籍は、国内外を問わず他にない。そして、歯科医学、動物学、魚類学、化石学、進化学などの広い見地から「歯」とは何かを展望する機会を与えてくれる。本書の序にあるとおり、「さまざまな分野の研究者に利用され、役立つ」本であることは間違いなく、いずれ「第3版が若い研究者によって出版される」ためにも、本書が多くの若い研究者に読まれることを私も望むのである。